

横浜の馬と人 百五十年の素描

村井 文彦

一 馬車道をめぐって

横浜市中区を中心街に「馬車道」という通りがある。

古来、人か牛が車を牽く習いであつた日本の道を、馬が牽いた車を通る。それは江戸幕府が港を開き、海外の人々が渡来、新たな文化が流入したことの一つの現れであつた。

横浜を描いた錦絵には、欧米人男女の乗馬姿も見える。

渡来した人々の中には馬に親しみ、馬で街中を闊歩する者も少なくなかつた。フランスの海軍士官E・スエンソンによれば、同国のレオン・ロツシユ公使は、長い時間撫で、話しかけ、視線を交わすほど、馬に深い愛情を抱いていた。任地の北アフリカでアラブ人から伝授された馬術の技も秀でたもので、チュニジアの高官から贈られた四頭の駿馬を横浜まで伴い、夕食会の折には、馴れた馬を食堂に招じ入

れ、客人に芸を披露させていた。

さて、新たに訪れた外国人の馬の乗り方は、当然、日本のそれとは大きく異なるものであつた。ハインリッヒ・シュリーマンは「日本では右側から馬に乗る」と記している。

海外では左側から跨っていたのだ。馬具も異なる。日本の鐙は履物のような独特の形をしているが、海外の鐙は基本的に輪の形だつた。また、蹄鉄もない。替りに日本の馬の「藁のサンダル」が外国人の注目を集めた。さらに彼は「ヨーロッパならば尻尾が来るべきところに、日本式に頭が来ていた」と馬の繋ぎ方が正反対であることも記している。

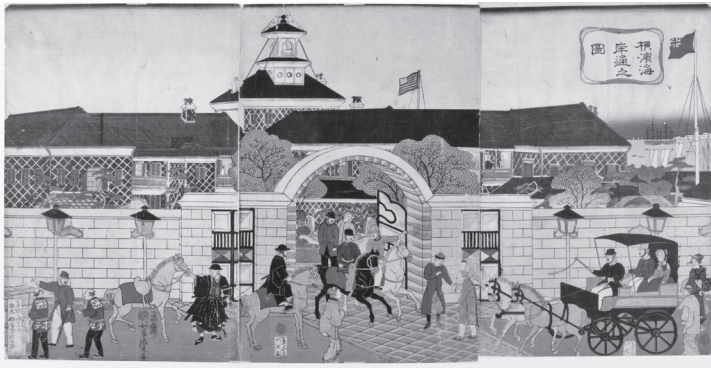
二 横浜で古き日本の馬と人に会う

シュリーマンは「日本の馬はいつもだがいに喧嘩しよう

としている。まったくひねくれていて、人になつかない」
「街道で荷を運んでいる馬に出会ったら、馬を避けて廻り
道しなければならぬ」とも記す。他にも多くの外国人が、
日本馬の気性の荒さや扱いにくさを特筆している。

加えて日本の馬は小柄だった。日本在来の馬はほとんど
が、ヨーロッパならポニーに分類される体格なのだ。

とはいえ、一八六〇年（安政末〜万延元）に日本を訪れ
た英国のE・B・ド・フォンブランク少佐は、日本の馬に
ついて「これという取柄が無い」「ひよろひよろの」馬で、
「どの馬もみな外国人をけがらい」「しているとしつつも、「大
きさや体つきから言っても、重たいものを運ぶのに適して
いる」「日本人の世話人がそばにいと、馬はとてもおと
なしく、すなおであった」と書き残している。スエenson
も、「大きな荷鞍にとっさりのせられ、蹄鉄のかわりに藁
のサンダルをはかされた馬の長い隊列が、鈴の音を陽気に
鳴らし、馬丁にかけ声をかけられながらゆつくり前進して
いく」と記していた。



孟齋芳虎『横浜海岸通之図』（明治初年）

馬の博物館所蔵

和洋の騎手と馬車が行き交う横浜の町並みを描いている。

ちなみに、ド・フォンブランク少佐の任務は、英国軍が
中国で用いる運搬用の馬多数と馬の飼料の干草を日本で買
付け、横浜か
ら船に載せて
大陸へ送るこ
とであった。
そのころ日
本には百万を
越える馬がい
た。馬格に劣
るといなが、
日本人自体が
小柄であった
ことに鑑みれ
ば、相応の体
格だったとす
べきである

う。そしてその全てが猛獣だったとは考えにくい。また、皆が扱い難い馬だったなら、それを使いこなすだけの技能もあつたはずである。

イタリヤの海軍士官V・F・アルミニオンは、江戸の大道で見世物を見、馬上の妙技に触れ「馬の背での巧みな技も大いに喜ばれる。西洋で馬を走らせるのと同じようにして、日本の武士も馬を走らせるのを好む」との感想を記した。

武士道が弓馬の道ならば、人馬一体においてロッシユ公使に匹敵する日本人も大勢いたことであろう。江戸の武士の中には、江戸鎌倉往還二十六里を日本橋・品川・六郷渡・川崎・神奈川・保土ヶ谷・戸塚・鎌倉と十一時間半くらいかけて往復する「遠馬」で馬術の腕を見せるものもいた。

さて、開かれた窓となつた横浜には、進取の気性にみちた若者が集まっていた。その一人、林董の回想録『後は昔の記』に、「西洋学を修むる青年輩の間には何事も西洋人に真似ること流行し」洋風に仕立て直した和服を着、西洋靴を履き、「西洋鞍を置きて馬に乗りたり」とある。そう

して「春花秋風、郊外に遠乗」意気揚々と道を行く彼らに、「野次馬攘夷家」が立ち塞がることもあつた。銃で牽制して退けようとするものの、威嚇の通じない「向こう見ず」

もいなくはない。そうなれば「一生懸命馬に策（むち）して逃げ」た、ともある。ここから、「西洋学を修むる青年」等が、西洋式馬術に早くも馴染んでいることがうかがえる。

三 近代競馬初出走

今、馬を多く見ることができるのは先ず競馬場であろう。

現代の競馬に通ずる近代競馬の日本初開催を見たのも横浜であつた。なお、わが国の古式競馬（こまくらべ、くらべ馬）は直線の馬場を二頭で競う、祭礼の意味合いの強いものだった。対する洋式競馬は、近代英国にならい、厳密な規則のもとに多数の馬を競わせる。

早くも開港の翌年一八六〇年（万延元）九月一日、横浜居留地内の本村（現 中区元町商店街一帯）の馬蹄形コースで競馬が開催された。続いて一八六二年（文久二）、居

留外国人が横浜レースクラブを結成、横浜新田（今の山下町の中華街）で競馬を行った。

横浜市開港資料館には『よこはまかけのり』はるのもよおし』と題する木版の史料がある。それは、この一八六二年（文久二）の競馬のレーシングプログラムを和訳したもので、race は「かけのり」。Hurdle race は「とびきかけのり」、pony race は「ポネレース」「こむまのかけのり」。Spring meeting（春季開催）は「はるのもよおし」、challenge cup は「そのまは」「ごみみのり」、colours of the rider（勝負服）は「のりごころどり」。secretary（書記）が「かきやく」なら judge（決勝審判委員）は当然「ぎょうご」、clerk of The course（馬場取締委員）は「のりばせわやく」、steward（理事・裁決委員）は「せわやく」である。開国からわずかに九年、英語の競馬用語が、親しみやすい平仮名に訳してある。そこから、より広く日本人の注目を期待していたことがうかがわれはしないだろうか。なお、Arabyan horse は「アラビヤむま」と訳されて

おり、「いとおほきなるむま」と注がついている。

横浜の競馬を主導したのは居留外国人であったが、ここで日本人も競馬を楽しみかつ学んだのであろう。

一八六五年（元治二）慶応元）には、横浜居留地練兵場（中区諏訪町港の見える丘公園）や横浜居留地射撃場（中区大和町・大和町商店街）で競馬が開かれた。絵入りロンドン新聞で遠く英国にまで報じられた「武士招待競走」は、ここ練兵場で開催されている。同じころ、居留外国人の遊歩新道（現 中区山手町近辺）でも競馬が行われていた。

四 根岸の丘の競馬場

一八六六年（慶応二）十月、根岸競馬場（現 中区根岸台・箕沢）が竣工した。本邦初の本格的な近代競馬場である。なお、地元根岸村には競馬場建設に係る古文書がある。近代競馬にかかわる近世地方史料という極めて稀な史料である。

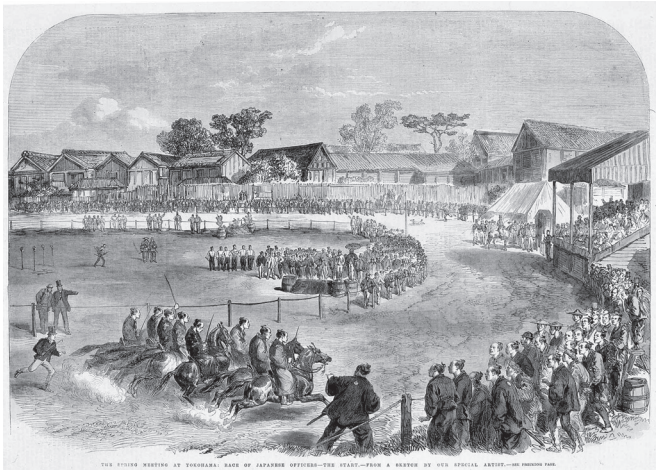
ここ根岸で一八六七年（慶応三）から一九四二年（昭和十七）十月十八日まで、七十五年間にわたって競馬が行わ

れていた。七十五年という年月は長い。東京競馬場でさえ、八十周年を迎えたのは二〇一三年（平成二五）のことである。ちなみに、東京競馬場と横浜との間には人馬の行き来もあった。時にはレースを終えた競走馬が、箕沢を出て山元町、戸部、高島町、青木橋、六角橋、菊名と進み、綱島で小休止、溝口、高津、久地から、稲田堤、調布橋、飛田給を経て東京競馬場まで、人に牽かれて歩んだこともある。

さて、今も根岸の丘にそびえるスタンドは、関東大震災の後に建てられた。一九二九年（昭和四）秋から、幾多のファンを集め、東洋一とうたわれたこのスタンドであるが、時につれて警戒を招くようになる。東京湾に臨み、横須賀の軍港を見通すことができたからである。

そして、第二次世界大戦開戦とともに、場内には敵性外国人の収容所が設置される。それから閉場までは、僅かのことであった。かつて根岸競馬場建設が進められた要因の一つは生麦事件であったという。これを思い起こし、さらに日本の近代競馬が外国人なしにはあり得なかつたことを

考えると、何とも言い難いものがある。



イラストレーテッド・ロンドン・ニュース 1865年7月8日号
「武士招待競走」 絵：チャールズ・ワグマン
馬の博物館蔵

おわりに

明治の歴史はこの競馬場に大きな使命を与えた。不平等

条約改定に向け、東京の鹿鳴館と並んで横浜の根岸競馬場が対外的なアピールの場となったのだ。また、横浜に做つた近代競馬場が各地に設けられ、現代に至る競馬の隆盛の走路も整えられた。他方、わが国在来の馬はほぼ姿を消した。日清・日露の戦争の経験から、彼らが近代戦の騎兵運用や輜重に不適格であるとみなされたためもある。日本の近代国家は「馬種改良」を推し進め、やがて、ほとんどの日本の馬は文久二年の「いと大きな馬」の仲間たちとなったのだった。

【参考文献】

E・B・ド・フォンブランク 『馬を買いに来た男 イギリス陸軍将校の幕末日本日記』（原著一八六二年 宮永孝訳 二〇一〇年 東西交流叢書 雄松堂書店）
V・F・アルミニョン 『イタリア使節の幕末見聞記』（原著一八六六年 大久保昭男訳 二〇〇〇年 講談社学術文庫 講談社）

H・シュリーマン 『シュリーマン旅行記 清国・日本』（原著一八六九年 石井和子訳 一九九八年 講談社学術文庫 講談社）

E・スエンソン 『江戸幕末滞在記』（原著一八六九―七〇年 長島要一訳 二〇〇三年 講談社学術文庫 講談社）
林董 『後は昔の記 林董回顧録』（原著一九一〇年 由井正臣校閲 一九七〇年 東洋文庫 平凡社）

『私たちの古文書ノート―根岸・新井家文書より―』（久良岐の会 一九九一年）

『春季特別展示 根岸競馬場開設一五〇周年記念 ハイカラケイバを初めて候 図録』（二〇一六年 馬の博物館）

日高嘉継・横田洋一 『浮世絵明治の競馬』（一九九八年 ショトルミュージアム 小学館）

日本馬匹輸送自動車株式会社 『日本馬匹輸送自動車株式会社五十年史』（一九九八年 日本馬匹輸送自動車株式会社）
渡辺一郎 『遠馬と遠足』『馬の文化叢書第四巻 馬と日本史三 近世』（一九九三年 馬事文化財団）所収